

少ないだけではなく、地球大気の場合とはやや異なる観測量を用いざるを得ない。竹内氏によれば、惑星大気研究者は「気象衛星ひまわりは持っているが、気圧計・温度計は持っていない気象学者」であるという。これは地球気象学と惑星大気科学の観測量の違いを巧妙に言い表している。しかし、近年では、地上望遠鏡や宇宙望遠鏡の発達によって、「温度計」は入手可能であり、通常的气象学的な解析に耐えるレベルのデータ取得が可能になってきている。この場合の問題点の1つは、観測の興味は大気科学のものでありながら、観測手段は天文学のものである点で、惑星大気研究者が観測施設を自由に使えるためには大気研究者から観測施設を持っている天文学者への強い働きかけが必要となっている。観測の問題は今後の惑星大気研究の展開において重要な課題である。

橋本成司氏（東京大学・理学系研究科）は大気進化の視点からの惑星大気研究について述べた。一般に大気の進化は、大気が自律的に決めるというよりも、固体惑星や超高層大気の都合で決まるという側面が強い。しかし、地表の現象は地表の温度・圧力に依存し、

温度・圧力は大気によって決められる。これを介して大気それ自体が進化に影響する。このような影響の代表的なものとして大気組成が変化したときの温室効果とアルベドの変化が挙げられる。前者に関わる研究は比較的多いものの、後者の研究は少ない。橋本氏は自身が研究している金星気候状態の安定性の問題について述べ、大気化学・地球化学と結合したアルベド変化が重要な役割を果たすことを示した。

この4人の講演者の発表に続いて、総合討論が予定されていた。しかし、全体の進行が遅れてしまったために総合討論がほとんどできなかったことは大変残念であった。

今回の講演者は、皆、気象学会の会員であり、しかも、古典的な意味での「気象学」研究室に所属しない。このことはこの分野の現状について示唆的である。伝統的气象学からややみ出したところで、しかし、気象学をベース（の一つ）として惑星大気にアプローチしようとしている若手研究者層が確実に育ちつつある。我が国における惑星大気の研究は、徐々に根付きつつあるといえよう。



第4回トヨタ先端科学技術研究助成プログラム課題募集

1. 対象：国内の大学・研究機関等（民間含む）
において「環境，エネルギー，安全」
に関する分野で、独創的、先進的な萌
芽段階の研究に従事している研究者お
よび研究グループ。なお、社会・人文
科学にまたがる領域も可。
2. 助成金額：総額5000万円程度（25件程度，最高200
万円）。但し、助成選考においては45歳
以下の方を優先とします。
3. 助成時期：平成12年4月
4. 募集締切：平成11年9月30日（木）
なお、英文での申請も可。
5. 応募用紙請求・問合せ先：
〒471-8572 愛知県豊田市トヨタ町1
トヨタ自動車株式会社 技術管理部
研究助成プログラム事務局
Tel：0565-23-6312，Fax：0565-23-5744
E-mail：yasuda@mother.ee.toyota.co.jp